

短期間の施設入所により身体機能低下を呈した症例 ～超高齢の利用者に行ったリハビリ紹介～

利用者情報 90歳台後半 女性 病名：大動脈弁閉鎖症

住居：市営住宅の2階に娘と2人暮らし。市営住宅にはエレベータがないため、階段昇降が必須。

経過：家庭の事情から2か月間施設入所となり、身体機能が低下。

在宅に復帰するが、自宅内移動、及び外出が困難になったため、訪問リハビリ介入開始。

主訴：家族・本人の希望：自宅での生活を継続したい。

目標：自宅での生活を継続するため、自宅内移動能力の向上。



初期評価

FIM：103/126点
(運動：73/91点 認知：30/35点)

歩行	階段	移乗浴槽
4	4	4



自宅内歩行、及び階段昇降が軽介助レベル。持久力も低下していたため、家族の付き添いだけでは外出が困難な状態。

リハビリでは階段昇降訓練、屋外歩行訓練を中心に実施。

超高齢であるため、運動量は介入の度に検討する必要があった。

家族も協力的であったため、自主訓練の際には、心拍数を基準に休憩を取るよう説明した。

2か月後

FIM：108/126点
(運動：78/91点 認知：30/35点)

歩行	階段	移乗浴槽
6	6	5



自宅内移動が伝い歩きにて可能。階段昇降及び屋外歩行も家族の見守りで可能。短期入所する前と同等の身体機能を獲得し、自宅生活の継続が可能となった。

リハビリでは、屋外歩行訓練を安定して実施できるようになり、市営住宅1周(約200m)の歩行が可能となった。

【まとめ】

短期間の施設入所により身体機能低下を呈した超高齢者に対して、自宅生活の継続を目的にリハビリ介入を行った。本人だけでなく、家族も協力的にリハビリに取り組んでいたこともあり、2か月で入所前の身体機能を獲得するに至った。

その後、無事節日の誕生日を迎えられた。ADL改善後にコロナ罹患があり、自宅内ADLの低下を認めしたが、屋外歩行や階段昇降が運動習慣となっていたため、早期にADLは改善している。

今後も、自宅生活を継続できるよう訪問リハビリでの支援を継続する。

